

知識量、それとも思考力

—頭の良さは何で決める?—

● 村 越 行 雄

はじめに：

頭の良さは何で決める？学校の成績が良いとか、一流大学に入学したとか、何でも知っているとか、深く考えているとか、問題解決能力があるとか、状況を的確に判断するとか、その他にも様々な形で言われる。それらは知的、理性的な能力を意味しているのであろう。広く知っており、深く考えることであろう。どれほど広く知っているか、どれほど深く考えるか、それらについて普通の人々よりも優れていることであろう。でも、何か曖昧で、はっきりしないところがあると誰もが感じるであろう。その原因は、2つの異なる知識と思考が入り交じり、知識と思考がはっきりしないまま同居し、それで「頭が良い」と言われるからである。そこで、知識量と思考力について分析していきたいと思う。

知識と思考：

知識は、何かについて知り、その結果として形のあるものとして頭の中に定着することである。例えば、日々の生活の中で多くのことを知るが、それらは知識として頭の中に定着し、蓄積されていく。知るという行為の結果が知識であり、形のあるものとして蓄積されていくことになり、日々多くのことを知り、その結果である知識が蓄積され、記憶されていく。知識量はいかに多くの知識が定着し、蓄積され、記憶されていくかによって決められる。そのような言い方をするのは、何らかの理由で、定着しても蓄積されないことは起きるし、蓄積されても思い出せないことも起きるのであって、定着と蓄積と記憶を分ける方が混乱を避けることができるからである。思い出せない知識は生きた知識として活用することができないことになり、死んだ知識と言え、知識量にはカウントされない。思い出せなければ、知識が存在したことも分からないことになり、死んだ知識と言うよりは、知識の非存在と言う方が適しているかもしれない。

思考は、何かについて考えることであり、考えるという行為そのもののことであり、形のないものとして頭の中に存在することになる。例えば、買い物の際に、過去の自分の経験から、さらに他から得た知識から、一言で言えば、知識から、どの店で、何をかうかを考えて決める。広く言えば、問題を解決する場合、様々な知識を可能な限り多く使用して考え、最善でなくても、最適な解決策を見つけ出すことになり、その時に思考が活躍する。また、状況を的確に把握する場合、同様に、様々な知識を可能な限り多く使用して考え、状況を判断することになり、その時に思考が活躍する。考えるという行為が思考であり、形のないものとして、表には現れず、裏で活躍するようなものである。

そう捉えれば、知識は知る行為の結果で、形のあるものとして存在するのに対して、思考は考える行為そのもので、形のないものとして存在すると言えよう。つまり、知識と思考は2つの異なるものとして存在する。ただし、知識が0存在で、思考しかないとか、思考が0存在で、知識しかないとか、いずれか一方が否定され、他方だけが存在するような関係にあるのではなく、いずれに重きを置くかの関係にある。また、いくら知識量が豊富であっても、思考力が低ければ、

空回りするし、思考力が高くても、知識量が貧弱であれば、同様に空回りする。ある一定水準の知識量があって初めてある一定水準の思考力を発揮することができるのであり、互いに影響し合って水準を上げていくことができる。相乗関係にある。ただし、実際には知識量が豊富でありながら、思考力が極めて低い場合もあれば、思考力は高いのに知識量が極めて貧弱な場合もある。なお、思考は考える行為であり、行為を遂行する能力に関わるので「思考力」と呼ぶことができるが、知識は定着し、蓄積され、記憶されることに関わる為に、知識力は知識量に大きく依存することになり、「知識量」と呼ぶことができる。そうであれば、知識と思考は知識量と思考力に基づくことになり、数量を増やせば知識が高くなり、能力を上げれば思考が高くなるという関係にある。簡単に言えば、知識量を増やせば物知りになり、思考力を上げれば思慮深いとされる。

具体例で説明すれば分かりやすいであろう。冬が近づいてきたので、冬物を買おうとする。冬用の衣類（手袋、マフラー、靴下なども含む衣類全般）を買うには、防寒、重量、価格、品質、デザインなど、様々なものが対象になる。どの衣類を、どの店で買うかを決めるには、それらに関する知識を多く得なければならない。そして、それらの知識を使用して思考し、最終的に特定の衣類を、特定の店で買うことを決め、実際に買うことになる。知識量が少なければ、思考力を発揮する範囲が狭まり、多ければ広がる。勿論、知識量が多く、思考力を発揮する範囲が広くても、あくまでもその上でも、結局価格を重視して安い物を買うことはあるし、デザインを重視して（流行の物をほしがったり、自分の好きなデザインをほしがったり）価格に関係なく買うこともある。その場合は知識量が少なくても買う場合、また知識量が全くなくても買う場合とは根本的に異なる。

それに類似する例は日常生活で数え切れないほどある。知識とか、思考とか言うと、何か高度なものを想像することがよくある。決してそうではない。極めて身近なことでもある。何も数学、論理学などを勉強しなければ思考力が高められないのではない。そのような高度な思考力があれば、それに越したことはない。しかし、日常的な思考力も身近なことで十分高められる。つまり、日常生活を考えて暮らすことである。そうであるとしても、多くの人々が余り知識を得ず、余り考えず、ただ流れに流されて暮らしているのは確かである。時には、インターネットによって膨大な情報が流され、得られる知識量が膨大すぎて押しつぶされ、十分に考えることができなくなってしまいうこともある。たとえそうであっても、知識を得、思考することはいつでも、どこでもできることには変わらない。それは忘れてはいけない。何の知識も思考もなく、偶然見つけた店に入り、偶然見かけた物を買うのは構わないが、それは様々な意味で損をする結果になろう。そう感じる人々も多くいるはずである。買った後で、より良い物を見つけ、後悔することもある。なお、正確には、情報を知り、その結果として頭の中に知識として定着されるのであり、情報があっても知らなければ知識にならず、情報量と知識量は必ずしも同一になるのではなく、世間にある全ての情報を全て知って知識になる訳ではないが、ここでは単純化して同一扱にする。

知識と思考が知識量と思考力で測られるとすれば、いかに知識量を増やすか、いかに思考力を上げるかが関心事になる。ありすぎる知識量は混乱を招き、高すぎる思考力は不幸にする。そのような言い方を耳にすることがよくある。知識量が多すぎると、絞ったり、まとめたりすることが困難になり、何も決められずに終わってしまうとか、思考力が高すぎると、従順さを失い、生意気になり、結果的に不幸になってしまうとか、様々な言い方がされる。本当に、そうであろうか。知識がなければ、出されたものをそのまま受け入れ、それに決めるしかないし、思考しなれば、自分にとっても楽であり、他の人々にとっても言うことを聞き、素直に従い、扱いやすくなる。それで、本当にいいのであろうか。何も知らず、何も考えず、ただ周りの人々に合わせ、

従うだけでいいのであろうか。

意識：

知識も思考も意識の中でのことである。そこで、意識について考えてみよう。一般的には、外界にある物を見て、それを認識し、その上で思考し、判断し、それを外界において実際に行動に移すことになる。外界（→認識→思考→判断→）外界という過程になり、括弧内が意識過程を表す。さらに深く掘り下げていくと、より詳しく意識を理解することができよう。物を見て、認識する時、例えば、物をリンゴとして認識すること、そしてそこにリンゴがあるという事実を認識することが含まれる。つまり、物の認識と物の存在の認識である。しかし、物は存在することで初めて認識されることを考えれば、そこにリンゴがあるという事実を集約することができ、その中で物がリンゴであるかが認識されると捉えるべきである。まず、そこに物がある、次に物がリンゴであるという順序になる。物をリンゴとして認識するとは、すでにリンゴの概念（リンゴとは何か、どのような物か）があって、意識の中に浮かぶ物の像とすでにあるリンゴの概念がつながって物がリンゴであると認識することである。しかし、リンゴなどのような普通の物の認識はそのような過程を経ずに（敢えて意識しないで、自然に）なされる。その意味からも、そこにリンゴがあるという事実の認識を集約することができる。ただし、物を見て、認識するにはそのような2重の意味があり、それらの混同によって生み出される問題を考えれば、その相違を頭に入れておく必要はある。ともかく、複雑にしない為に物の認識と事実の認識（物の存在に関する事実）の差を問題にしないで話を進めることにする。

外界に存在する物を五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）によって知覚し、認識すると、その事実が意識の中に置き換えられて存在することになる。外界の事実が認識することで意識の中の事実になることである。それは、外界にある物を知り、それが意識の中で知識として定着すると言い換えられるものである。知る行為とその結果である知識はそのような関係にあり、知識は意識の中で形のあるものとして存在することになる。それに対して、思考という考える行為は、意識の中にあるものを新たに意識することである。意識を意識することである。より正確には、意識の中にすでに存在するものを「既存意識」と呼べば、既存意識を意識することである。知識はすでに意識の中に存在するものであると捉えれば、既存意識とすることができよう。そうであれば、知識は既存意識のことになり、思考は既存意識を意識することになる。なお、既存意識は知識、情報、イメージなどと類似するが、基本的には異なり、あくまでも単純化すれば、そう言うにすぎない。

知識と思考を既存意識と既存意識の意識とすることで、何が見えてくるのであろうか。意識の中にすでに存在している既存意識には、感覚的な感覚データから理性的な抽象的概念まで、さらには理想、空想、創造物、想像物、夢などまでがあり、意識の中にすでに存在するものであれば何でも構わないことになる。それらを意識すれば全てが考える行為になる。「考える」と言うと、何か知的で、理性的な能力が求められるかのように思われている。勿論、考えることはそれ自体で知的で、理性的なことであるが、その対象は感覚から理性まで、存在から非存在まで、あらゆるものになる。ただ単に意識するのではなく、意識していることを意識するには知的で、理性的な能力が必要になる。ただ単に意識するとは、意識し、その結果として既存意識が存在する段階で終わることである。それをさらに進めて既存意識を意識する段階に行くことは、自分が求めれば、誰にもできることである。例えば、感覚的な人、即物的な人なども、つまり知的ではなく、理性的ではないとされる人であっても、外界を知覚し、感覚データを得ることはできるし、それ

を意識することはできる。台所にあるいくつかの野菜を見て、それらの感覚データを意識し、何か美味しい料理を考えることはできる。朝起きて、いくつかの衣類を見て、それらの感覚データを意識し、何を着ていくかを考えてコーディネートすることはできる。そのようなことは誰でもできることであるし、誰もが日々行っていることである。つまり、誰もが考えているのである。勿論、難しい抽象的な概念などを考えるのは困難であり、1部の人々しか考えないかもしれない。でも、理想、空想、夢などは誰もが抱くであろう。結局、対象が何であれ、人々はみんな考えているのである。同様に、ありとあらゆる既存意識がある以上、知識もありとあらゆるものがあり、結局人々はみんな知識を持っているのである。まとめて言えば、人々はみんな知識を持っており、思考していることになる。ただ、知識量と思考力の程度の差があるだけである。

既存意識は意識の中で形のあるものとして存在するが、既存意識を意識するのは、普通の場合、ただ意識して終わるのではなく、既存意識同士をつなげ、まとめ上げることもする。意識するとか、つなげるとか、まとめ上げるとか、それらは形のないものとして存在することになる。たとえば言えば、建築資材（知識）を使って建物を造る時に設計図（思考）は重要な位置を占め、設計図なしでは、建物は外見、耐震性、その他の点で不備ができ、欠陥建物になってしまう。木材、鉄材、セメントなどの建築資材は具体的な形のあるものとしてあり、見たり、触ったり、五感によって確認することができるが、線と数字によってできる設計図はまさに数学、論理学などのように具体性ではなく、抽象化された図面であり、物理的な物のような具体的な形を持つことはなく、あるとしても、抽象化された形があるにすぎず、建築資材と建物のような具体的な形を持つことはない。そうであっても、具体的な形のある建築資材から、具体的な形のある建物にする為には、具体的な形のない設計図が必要になり、それによってきちんとした建物を造ることができる。素人が造った建物と建築家が造った建物を比べれば、その差は明らかであろう。まさに、そのようにして知識を使用して思考することが成立する。知識なしの思考は建築資材のない設計図にすぎず、思考なしの知識は設計図のない建築資材にすぎない。それでも、無理に造れば、建物は欠陥だらけになってしまう。それでは住めないし、住んでも危険すぎて、命を落とすことになる。

では、知識と思考に関する基本的な知識を得たものとして、基本的な知識を使用して具体的なケースを思考していこう。

人間の成長：

知識量がある一定水準に達しないと思考することができないかのように思われることがある。また、知識量が増すにつれて思考力が高くなるかのように思われることがある。極端な言い方をすれば、知識量が増えれば、自然に、何もしなくても、思考力は生まれ、高まるかのように思われることがある。本当に、そうであろうか。そうであれば、赤ん坊は生まれてからの年月が短い為知識量は非常に少なく、その為思考力がないか、たとえあるとしても、幼稚な思考力にすぎなくなる。そう思うから、大人が赤ん坊に赤ちゃん言葉で話しかけたり、言葉は一切使わずにジェスチャーだけで対応したりするのである。もしかしたら、赤ん坊は大人と同一の思考力を持っていると思ったことはないであろうか。ただ、知識量が余りない為、つまり言葉を余り知らない為に表面化することがなく、誰も赤ん坊の思考力の高さに気づかないだけにすぎないと思ったことはないであろうか。

言語について言えば、文法は1000年以上、2000年以上余り変わらずに存在し続けるが、語は文化の発展に伴い、自文化自体の発展もあれば、他文化との接触の繰り返しによる自文化の発展も

あるが、量を増やしていく。しかも、語彙量の多さが文化程度の高さを表すとされることがある。それを当てはめれば、思考力は赤ん坊も大人も余り変わらず、ほぼ同一であるが、知識量は大きく異なり、大人の方が赤ん坊よりも遙かに大量で、豊富になると言えるであろう。つまり、赤ん坊は思考力がない訳でもなく、貧弱な訳でもなく、ただ知識量が極端に少ないだけにすぎないと言うことはできよう。さらには、古代人も現代人も思考力は余り変わらず、ほぼ同一であって、ただ社会環境が異なる為に、知識の量よりは、むしろ知識の質（内容）が異なるにすぎないと言うこともできよう。知識量が余り変わらないとするのは、知識量は人々の頭の中で知識が定着し、蓄積され、記憶される量のことであるとすれば、古代人も現代人も思い出すことのできる知識量はそれほど変わらないと思えるからである。人間の記憶には限界があり、古代から現代までの全ての知識を記憶することはあり得ないからである。勿論、情報は総量として現在の方が遙かに多いのは確かであるが、ただ人々が頭の中に入れられる知識量は記憶力の為に限界があり、古代人も現代人も余り変わらないという意味である。

ここでは、赤ん坊に限定して話を進めていくことにする。大人は赤ん坊よりも知識量が多い為に、その知識量からあたかも大人は思考力があり、頭が良いと思われているにすぎない。語彙量の多さが文化程度の高さを表すように、知識量の多さが思考力の高さを表し、頭が良いと勘違いしている。そのように言うことができよう。多分、反発する人もいるであろう。赤ん坊が大人と同程度の思考力を持つことはあり得ないと信じているからである。たとえを使えば理解しやすいかもしれない。思考を容器に、知識を中身にたとえてみる。生まれた時に容器がなければ、いくら中身が入ってきても、それを収める容器がない為に居場所を失って消滅する。少なくとも、生まれた時には容器があるはずである。成長するにつれて中身は増加し、それを収めなければならぬ容器も拡大するであろう。しかし、中身は無限と言えるほどに増加するし、それに合わせて容器も無限に拡大することになってしまう。それはあり得ないであろう。知識量は記憶することのできる範囲によって制限されるからである。そうであっても、容器自体が拡大することには変わらない。そこで、伸縮性のある容器であると考えれば、分かりやすいであろう。容器自体は変わらず、ただ中身が増加すれば容器が伸び、減少すれば縮むにすぎない。風船に水を入れていくと、ある時点で破裂するように、中身を入れすぎると容器は伸びすぎて破裂してしまう。そうならないように、記憶量という制約によって止められている。逆に、中身を入れていかないと、容器は縮むことになるが、また中身を入れていくと、容器は元に戻り、さらに伸びていく。そのようにして、伸縮性のある容器は、容器は同一であるが、中身に合わせて伸びたり、縮んだりして対応する。そのたとえを使えば、赤ん坊は大人と同一の容器を持つ（思考力は同一である）が、中身の量によって容器が伸縮する（知識量は大きく異なる）と言えよう。また、縮んだ容器に中身を入れていくと、容器は元に戻り、さらに伸びていくように、知識量の少ない大人であっても、いつでも知識を得ることで、知識量が増え、それに見合った思考力も持つことになる。

容器自体は同一で、ただ伸縮するにすぎないが、見た目には惑わされて、容器自体が拡大したり、縮小したりすると見てしまう。それが誤解の原因である。赤ん坊は最も縮んだ状態の容器で、余り縮みすぎてよく見えない為に、思考力が非常に貧弱である、また思考力がないと誤解してしまう。大人になると、成長過程で中身を増やし続け、大きく伸びて膨らんだ状態の容器になり、赤ん坊とは比べられないほどの高い思考力を持つと誤解してしまう。しかし、赤ん坊も大人も思考力は同一であって（強すぎるのであれば、ほぼ同一でも、同程度でも、何でも構わないが）、ただ知識量の差によって思考力が伸縮するにすぎない。従って、赤ん坊は思考力が貧弱であるとか、思考力がないとは言えないはずである。むしろ、大人と同一の思考力を持っているのである。そ

の認識は必要であり、重要である。喋れない赤ん坊でははっきりしないが、喋れるようになる幼児を見れば、さらに小学生を見れば、はっきりしてくるであろう。幼児の言うことが大人のような言い方、大人のような考え方であるのに驚く人々は多くいるはずである。それは、大人の言い方、考え方などをオウム返しにただ真似ているのではない。そのように言い、そのように考えるだけの思考力がすでにあることを意味する。特に、小学生を見ると、大人顔負けの言い方、考え方などに驚き、生意気と思ったり、叱ったりする人々は多くいる。時には、大人よりもしっかりしていると思えるであろう。それは偶然ではない。それだけの思考力を持っているからである。

もし赤ん坊からすでに大人と同一の思考力を持っていると捉えることができれば、赤ん坊、幼児、小学生などの扱い方を変えていく必要があることに気づくであろう。赤ちゃん言葉で話したり、ただ叱ったり、体罰を加えたり、その他多くのことは、思考力がないから（あっても、非常に貧弱で、無いに等しいから）、普通に（大人に対するように）言っても分からないと思っているのである。赤ちゃん言葉の場合、赤ん坊は思考力がないから、普通に言っても分からないから、「ワンワン」、「ブーブー」などのように簡単で、分かりやすい言い方をする。勿論、赤ん坊は知識量がほとんどない為に普通の言葉は知らない。あくまでも普通の言葉を知らないだけで、決して思考力がない訳ではない。赤ん坊にとっては、元々知識量がほとんどないのであって、言葉と言葉以外のこと、また赤ちゃん言葉と普通の言葉、あらゆるものを覚えるには同一の努力が必要になる。そうであれば、まず赤ちゃん言葉を覚え、次に普通の言葉を覚えるという具合に2重手間になる。最初から捨てるのが分かっている赤ちゃん言葉に時間と労力を使うのであれば、最初から普通の言葉で話しかける方が良いであろう。それに、「ワンワン」と「犬」にどれほどの難しさの違いがあるのだろうか。あるとすれば、「犬」の意味を理解するだけの思考力がない為に、犬の鳴き声である「ワンワン」を使うと言うしかないであろう。しかし、赤ん坊には思考力がある以上、そのような理由づけは説得力がない。大人であっても、名前（呼び名）の意味を理解して使っているのではない。目の前にいる物を「犬」と呼ぶことを聞き、犬の意味なしにただ呼び方を覚えるだけである。もし興味があれば、固有名（固有名詞）に関する因果理論（クリプケなど）を調べれば分かるであろう。そうであれば、赤ん坊も同様に、意味が分からないから「ワンワン」と呼ぶのではなく、「犬」と呼べばいいことである。また、言葉は言う時だけでなく、考える時にも使用される手段であり、言葉は思考力を高める（正確には、思考という容器を伸ばして膨らませる）上で重要な手段になる。「ワンワン」からどのように考えを展開することができるだろうか。「犬」であれば、野良犬、捨て犬、柴犬など、いくらでも考えを展開していくことができる。人間の成長、特に思考の成長を考える時、普通の言葉を覚えることは大事である。だから、赤ちゃん言葉から始めるのではなく、普通の言葉から始めるべきなのである。

ただ叱る場合はどうであろうか。赤ん坊から小学生までの小さい子を、何も説明しないでただ叱るのは、何が悪いかを説明しても理解することができないと思い、だからいきなり叱って、「ダメ!」、「止めなさい!」、時には「馬鹿!」とまで言う。まさに、犬の訓練のようなものである。綱を使って、「待て!」、「座れ!」、「走れ!」などと言って、何の説明なしに命令して訓練するようなものである。また、軍隊において何の説明なしに命令に従わせ、訓練するようなものである。しかし、小さな子であっても、説明すれば十分理解することのできる思考力はある。また、体罰の場合も同様に、言っても分からないから肉体的に罰を加える。言っても理解するだけの思考力がないと思っているからである。小さな子から見れば、説明してくれれば、きちんと言ってくれれば、理解して対応するだけの思考力があるのに、それなのにただ叱られたり、体罰を加えられたりするだけであると思うであろうし、そのことで思考力にダメージを与えることになるう

(思考という容器を縮ませるだけでなく、容器自体を破壊することになる)。大事なことは、小さい子も大人と同一の思考力を持っていることを認識することであり、ただ叱るのではなく、体罰を加えるのではなく、自分で考える機会を与えるべきであり、それは説明し、きちんと言うことによって可能になる。

そう言っても、まだ反発する人はいるであろう。小さな子の言動から、大人から見れば、逸脱していると思われるからである。例えば、良いか悪いかの価値などがある。何をしたいか、何をしてはいけないか、そのような価値判断ができないから、平気で悪いことをすると思われる。大人の価値基準からすれば、逸脱すると思われる。それは確かである。しかし、それは思考力には関係なく、知識量に関わることである。良いか悪いかの価値、正しいか間違いかの真理、その他にも様々なことは教えられて知識として定着し、蓄積され、記憶されていく。従って、小さな子の言動が逸脱と思われるのは、思考力ないからではなく、あくまでもそのような知識がないからにすぎない。単純に言えば、知っているか、知らないかである。思考力があり、考えることができるのであるから、知れば、それを考え、それに従って言うことができるし、行動することができるのである。知らないから、ただそれだけの理由で、言動が逸脱するにすぎない。知れば、きちんと考え、言動は本筋に戻るのである。本筋からの逸脱は考える能力がないからでも、頭が悪いからでもなく、ただ単純に知らないだけである。知れば、いつでも本筋に戻すことはできる。勿論、いくら言っても、いくら知っても、本筋に戻らないケースはある。それは思考力がダメージを受け、思考停止になったり、反抗心を抱いたりするからである。知識量がほとんどない小さな子は知れば、素直に考え、素直に従うものである。知識が教えられる場合は、家庭であったり、学校であったり、社会であったり、国家であったり、至る所にある。そのような場を通して、知識量は増えていき、特に必要とされる知識を得ていくのである。そのような知識がなければ、批判され、否定されていくことになる。それはあくまでも知識量の問題であって、思考力と混同すべきではない。思考力は赤ん坊から大人まで、死ぬまで同一である。

教育：

学校教育が中心になるが。広く教育一般でも構わない。知識偏重教育として批判されることがよくある。学校は知識の詰め込み教育であると言われる。知識をできる限り多く教え、それをただ暗記させる詰め込み主義である。裏を返せば、理解する能力、応用する能力が養われないことになる。知識と思考の区別から言えば、知識だけが重視され、思考が軽視、無視されることである。勿論、古代から、先人が切り開いた知識を暗記する教育が重視されてきたことは確かである。古代ギリシャ・ローマ時代でも記憶は教育の重要課題であり、文法、レトリックなどでは記憶は必須の条件であった。まさに、現在は過去の知識の集積であると言えよう。過去の知識がなければ現在はあり得ない。例えば、科学者は過去の成果を知識として持っていなければ、自分で最初から始めなければならず、それでは発展はあり得ない。知の継承である。過去を知ることによって現在を知るという具合に、それが繰り返されることで受け継がれ、それらの集積の上にいるから更なる発展ができる。科学者も過去の知識の集積の上で、それに付け足すことで発展を継続させていく。

知識量は知識が定着し、蓄積され、記憶される量であって、暗記が知識量を増やす要因である。暗記しなければ知識量は増えないし、また暗記しても、忘れて思い出せなければ知識量としてカウントされない。その意味から言えば、知識をできる限り多く教え、それを暗記させること自体は悪い訳ではないはずである。小学校から、それ以前から、学校、その他の場で実に多くのこと

が教えられ、暗記してきたことは誰もが覚えていることである。そのことが悪いとは誰も思わないであろう。では、なぜ問題になるのであろうか。たとえて言えば、道具を沢山持っていて、使わなければ死んだも同然である。道具は使われて初めて機能を発揮する。機能を意味と捉えれば、道具の意味が失われ、意味のない道具になり、結局道具ではなくなってしまう。時には、道具を陳列して飾る人もいる。道具の本来の意味ではなく、別の意味が付与されることである。何かを作る為に「使う」のではなく、芸術作品のように、見られて楽しむ為に「飾る」ことである。しかし、本来の「使う」機能をなくした道具はもはや道具ではない。別の物である。知識も同様である。知識は使って初めて知識の本来の機能を果たすのであって、知識を使わず、ただ陳列して飾っても、死んだ知識にすぎないことになる。知識をひけらかす人がいるが、それはまさに知識を飾って自分を良く見せる為である。自分がいかに多くのことを知っているかをひけらかし、それによって自分を飾り立てて良く思わせることである。今の学校教育における知識の詰め込み主義はそのような状況で、知識をひけらかし、飾るにすぎない。

それに対しては、知識量が増えれば、自然に思考力が生まれ、高められると反論する人もいるであろう。また、知識を暗記するには理解する能力が必要になり、知識を得るだけで思考力は養われると思う人もいるであろう。まず、言えることは、赤ん坊であってもすでに思考力を持っており、誕生以来思考力はある。知識量がある一定水準に達して思考力が生まれるのではない。前述のように、知識がいくら入ってきて、それが収まる容器（思考力）がなければ、言い換えると、知識が定着し、蓄積され、記憶される場がなければ、知識は流れ出し、頭の中で知識として留まることはできない。次に、知識とは関係なく思考力はすでにあるとして、知識量が増えると思考力は養われ、高められるであろうか。もし理解する能力を思考力であると捉えるのであれば、知識量が増えると理解力は養われ、高められるであろうか。知識を得るのに理解は必要ない、知識が何を意味するかを理解する必要はない、そのような言い方は可能であろう。つまり、丸暗記である。知識の意味を理解することなく、知識それ自体をただ暗記することはできる。試験前日、時間がないので、意味も分からずにただ丸暗記したことを思い出すであろう。スキャナーで文章をスキャンする時、文字を判別するのではなく、白と黒の像として映し出すのと同じである。結局、知識を理解することなく、知識を暗記して得ることはできることになる。そうであれば、知識量が増えれば、自然に理解力が高まり、思考力が高まるとは必ずしも言えないことになる。

また、学校では知識を教え、得させ、後は卒業後に実際に社会で使えばいいことであると思う人もいるであろう。今度は、理解力ではなく、応用力である。そのような考えはかなり一般的である。学校は知識を教える場であって、知識を実際に応用するのは社会であると考えたことである。勿論、卒業後だけでなく、卒業前でも学校の外的場で、つまり社会で使うことも含められる。単純な言い方をすれば、学校は理論の場で、社会は実践の場である。そのような仕分けはよく行われている。だからと言って、学校が知識の場で、社会が思考の場であると言う人はいないであろう。それでは、小さい頃はひたすら知識を得、ある一定の年齢になって初めて思考し出すと言っているようなものである。ただし、そう思っている人はいる。小さい頃は考えずにひたすら多くのことを知り、暗記し、考えるのは大人になってからであると言いたいのであろう。それは赤ん坊には思考力がなく、大人になって思考力が得られると思うからである。極論は別にして、学校では知識と思考の両方が教えられるべきである。では、応用はどうか。応用は知識を具体的なことに当てはめて使用することである。具体的なことは実際の社会でそのことが典型的であるが、学校でのことであっても構わない。数学の授業でいくつもの方程式を知っていれば、その知識を使って問題を解くことができる。それは、社会で遭遇する問題を様々な知識を使って解決す

るのと同一である。言い換えると、応用は理論の場でも、実践の場でも可能なのである。例えば、シミュレーションのように、実際の問題を想定し、その仮の想定された問題を知識を使って練習することもできる。また、歴史について、歴史的な事実の知識を使って特定の時代がどうであったかを想定することもできる。結局、応用は社会でも、学校でも、その他のあらゆる場でも可能になる。そうであれば、敢えて知識を学校に、応用を社会に限定する必要はなくなる。いつでも、どこでも知識を使って応用することはできるはずであり、そうすべきである。

思考力を理解力と応用力に置き換えて考えてきた。そのことから、知識量が増えれば自然に思考力が生まれ、高められる訳でもなければ、知識は学校で教え、思考は社会で実践されるという分断がある訳でもないことが明らかになる。それでも、知識の詰め込み主義が蔓延り、それが批判される。その原因の1つに入試の為の受験勉強がある。限られた時間内でより多くの知識を得、知識量を最大にする必要がある。知識を理解したり、応用したり、言い換えると、考えたりしている時間はない。考える時間を省いて、丸暗記でもいいから、知識量を最大にするように向かってしまう。つまり、知識+思考の省略形として知識がある。思考が無駄であると決めつけているのではなく、時間的制約の為にあくまでも省略形にするしかないと思われる。考えるのは大学に入ってから、社会に出てからするしかない。それが学校教育者の言い分であろう。思慮深さよりも物知りの方が尊重され、考えすぎて自滅するよりは、多くのことを知っている方が得をするという社会の風潮がある。そのような社会の風潮に後押しされて、その一環として学校教育も知識偏重主義に、知識の詰め込み主義に走っていく。児童、生徒、そして学生はあらゆる教科における知識をただひたすら得ていく。しかし、そこには落とし穴がある。知識と思考は相乗関係にあり、いくら知識だけを積み重ねていっても、思考が伴わなければ、思ったほど知識量は増えないからである。思考が伴って初めて知識の積み重ねがより高くなるのである。たとえば、煉瓦をいくら積み重ねても高く積めないし、積んでもすぐに崩れてしまうが、煉瓦をセメントで固めれば、土台がしっかりし、その上にセメントで固めながら煉瓦を積み重ねていけば高く積んでいくことができる。煉瓦を知識に、セメントを思考に置き換えれば、その意味ははっきりするであろう。

社会の風潮：

昔から知識量の豊富さが高く評価されてきた。物知り、博学などの知識量の豊富さに関わる場合だけでなく、思考に関わる有識者、専門家なども知識量の豊富さによって捉えられてきた。知識量の豊富さを尊重する社会の風潮がある。知識は形のあるものとして捉えやすく、確認しやすいが、思考は形のないものとして捉えにくく、確認しにくいことに起因しているのであろう。簡単に言えば、知識は目立つが、思考は背後に隠れて目立たない。従って、どうしても知識の方に目が行ってしまう。聞かれれば何でも答えられるような、何でも知っている人を頭が良いとして評価する。例えば、クイズ番組で難問奇問を全て解答することができるのと頭が良いとされる。余りよく知らない大学生は大学生失格であると思われる。一流大学出身者は知らないことが多いと、出身大学が馬鹿にされてしまう。高卒者が大卒者よりもよく知っている、大学そのものが否定されてしまう。高学歴者などの頭が良いとされる人々は、知識量の豊富さに直結して評価される。それほど知識優先主義が社会の風潮になっている。

思考の結果として知識は定着し、蓄積され、記憶されていく。複雑になるが、知識は知る行為の結果であるし、また知識を使って考える行為の結果としてもある。つまり、知ったことが知識になり、知識として存在すれば、今度は知識を知ることによって使用可能になり、知識を使って考え、

その結果が知識として存在することになり、それが繰り返されて知識量が増え、それに伴って思考力が高くなる。知識を重視するとは、結果だけを取り、いいとこ取りになる。知識は華々しく輝く。でも、考える苦勞は避けたい。結局、知識に目を奪われ、思考には目もくれない。極端で、大袈裟のように感じるかもしれない。そうかもしれないが、知る喜びと考える苦勞の対比はそれなりに意味があるであろう。楽は苦になり、苦は楽になる、良いたとえかもしれない。

社会の風潮があるとしても、昔と今では状況は異なっている。昔は情報量が少なく、人々の得ることのできる情報は少なく、そのような状況で情報を知り、知識として持っていることが尊重されてきた。むしろ、珍重されてきたと言える。つまり、希少価値である。人の知らない情報を知っているだけで高く評価された。たとえ何であれ、人の知らないことを知っていることはそれだけ評価されたのである。情報過少、また情報不足の中で人の知らない情報を知っているだけで評価されるのは、当然と言えば、当然のことである。しかし、インターネットが普及している現在、情報は溢れ、むしろ情報過多と言えるような状況になっている。人の知らない情報とされていたものは、今ではインターネットで調べれば、誰でも、いつでも、どこでも手に入れることができるようになったし、あらゆる情報を知ることができるようになった。もはや、人の知らない情報はあり得ない。知ろうと思えば、知ることができるのである。そのような時代では、物知り、博学などのように、また有識者、専門家などのように、知識量の豊富さを誇示することはできなくなってしまった。もし誇示するとすれば、知った知識（知る行為の結果としての知識）ではなく、理解した知識（理解する行為の結果としての知識）、考えた知識（考える行為の結果としての知識）などでなければならない。そうすると、知識力から理解力へ、また思考力へと移行することになる。結果としての知識は同じように見えるが、その過程は大きく異なっている。従って、例えば、科学者などの専門家も、いかに多くのことを知っているかを示すのではなく、すでにある知識をいかに理解し、知識を使っていかに考え、そして発見し、その知識を示さなければならない。単純化すれば、知る知識に留まるのではなく、理解する知識と考える知識にまで辿り着かなければならぬ。ただ単に知るのであれば、例えば、目の前に物が存在することを五感によって知覚し、知るように、誰でもできることになるからである。専門家であるには、それ以上が求められる。

情報過多の時代に知識量の豊富さを求めるのは奇妙であろう。人間の記憶力には限界があるが、コンピューターを使うことで、情報は自分の頭の中に知識として保存されると共に、コンピューターに保存されている情報をいつでも知ることができ、あらゆる知識を人々が持つことを可能にしているからである。つまり、人間+コンピューター=あらゆる知識である。その意味から言えば、学校教育において、ただ丸暗記してひたすら知識量を増やすことに専念させるのではなく、必要な知識だけを自分の頭の中に保存させ、後はインターネットで検索する方法を教える方が理に適っている。例えば、試験の時、全て持ち込み不可にすれば、授業で習ってきたことを丸暗記することになるし、設問も簡単なものになってしまうが、全て持ち込み可にし、しかもコンピューターの使用を認めれば、丸暗記する必要はなくなり、授業の講義ノートとコンピューターを使って考えて解答することになるし、設問も高度で、難しいものにすることができる。勿論、授業においてもコンピューター使用の利点はある。自分の頭とコンピューターを併用すれば、保存される知識量は無限と言えるほどになる。そのような中で、自分の頭の中だけで知識量の豊富さを求めるのは、奇妙であるだけでなく、時代錯誤でもあろう。

今でも、学校における入学試験、授業の試験など、会社における入社試験、昇進試験など、社会における資格試験、検定試験など、様々な試験に典型的に見られるように、知識重視は存在し

ている。それは知る知識であって、理解する知識でもなく、考える知識でもない。その原因の1つに試験そのものの在り方がある。いかに理解しているか、いかに考えているか、そのようなことを試験でチェックすることは非常に困難であり、どうしてもいかに多く知っているかをチェックするだけになってしまう。しかも、試験によって入学、入社、昇進、資格などが決められてしまうと、生活における重要なこと（成功、勝者、経済力など）が試験で決められてしまうことになり、それに向けて知識量の豊富さを求めてしまうことになる。一流大学の学生であったり、一流会社の社員であったり、資格（弁護士の資格から調理師の資格まで）を持っていたりすれば、それだけで評価される。そうなれば、知識量の豊富さを求めるしかないし、丸暗記でもいいから、とにかく少しでも多くの知識を覚えようとする。勿論、一般的には試験でコンピューターを使用することを禁じているので、自分の頭の中に知識を詰め込むしかない。

通常の試験（習ってきたことを試験する場合）ではなく、人生の大きな節目になる試験（入学試験、入社試験、資格試験など）では、習ってきたことを試験するのではなく、それぞれの分野で基本的に必要とされる知識を試験するのであり、従ってそれくらいは自分の頭の中に入れておくべきであると思われる。だから、コンピューターの使用は禁じられることになる。ともかく、コンピューターの使用が将来的に学校の授業でも、試験でも広がるのは間違いないであろう。そうなれば、知識量の豊富さの意味は見直しされるし、されなければならないであろう。

知ることのできる知識は、知ろうと思えば誰もが得ることのできる知識である。知ろうとしないか得ることのない知識である。その境目は何か。最近の若者は何も知らないとか、常識がないとか、様々な言われ方がされる。でも、オタクのように、アニメ・マンガ、鉄道など、非常に限定的な分野で膨大な知識量を持っている若者は多くいる。結局、知ろうとするか、知ろうとしないかの境目は必要とされる知識であるかどうかである。多分、アニメ・マンガなどは知らなくてもいい知識で、道徳は知らなければならない知識であろう。なぜ、そのように分けられるのか。それは、社会生活にとって必要かどうか基準になっているのであろう。そう言っても、一体何が社会生活にとって必要かどうかは曖昧である。今では、何でもがビジネスになるし、何でもが生活に浸透し、必要と思われる。アニメ・マンガであっても、単なる趣味でも娯楽でもなく、ビジネスとして、生活の糧として、なくてはならないものと思われる。道徳については、極端な言い方をすれば、なくても構わないものであると思われるのであろう。勿論、全くないで済ましているのではなく、法律がそれにとって代わり、法律を遵守するか、違反するかによって社会生活は維持することができると思われる。アニメ・マンガでも、道徳でも、あらゆるものは知識として存在する。アニメ・マンガ好きはアニメ・マンガの知識を得ること生まれ、道徳心は道徳の知識を得ること抱かれる。結局、あらゆるものは知識として存在し、その中から何を知ろうとし、何を知ろうとしないかが分かれてくる。それは、人によって、集団形態（家族、学校、会社、社会、国家など）によって、文化・伝統によって、宗教によって、時代によって、様々な要因によって変わるものである。常識とか、社会生活とか、そのような形で固定化して決めつけることはできない。例えば、自分自身にとって必要な知識、大学生にとって必要な知識、ビジネスマンにとって必要な知識、社会人にとって必要な知識、大人にとって必要な知識、日本人にとって必要な知識、クリスチャンにとって必要な知識など、全ての必要な知識は不変的ではなく、可変的である。

知る知識が理解する知識に、考える知識に進めば、本来的な意味で、知識を使って思考することができると言える。ところが、実際には知る知識に留まって、その中でいかに知識量を増やすかに集中してしまう。情報過多の時代で情報量が膨大すぎることで、コンピューターがまだ十分に

活用されていないこと、記憶力の制約によって自分の頭の中に保存することのできる知識量が限られていること、必要とされる知識が可変的で、明確に定まらないことなど、様々な理由で知る知識に留まるしかない。簡単に言えば、知るだけで精一杯で、それすらも十分ではない状態であって、理解し、考える時間もなければ、余裕もない。それが現状である。そうであっても、それで済まず訳にはいかない。知識を理解することなく、考えることなく、ただ単に知識を頭の中に詰め込んでも、宝の持ち腐れである。意識過程の面から見れば、意識の中には多数の既存意識が存在しているが、意識しないで通り過ぎてしまえば、存在しないのも同然で、意識して初めて存在に気づき、その上で既存意識同士をつなげ、まとめ上げることで判断することができ、それで実際に問題を解決することができる。つまり、多数ある知識をそのままにしておけば、存在しないのも同然であり、何が知識としてあるかを知り、しかも知識が何であるかを理解し、考えることで、いくつかの知識をつなげ、まとめ上げていくことができ、問題の解決につながっていく。結局、単なる知識（知る知識）をいくら詰め込んでも、しかもそれが丸暗記であれば、0効果では済まず、マイナス効果になってしまう。

状況判断：

実際に生活し生きている人々にとっては、自分を取り巻く状況を正確に判断することが重要である。状況判断を誤れば損害を被るし、状況判断が正しければ利益を得る。成功するか、失敗するかは状況判断に依存するところが大きい。その際、何を知り、どのように考えるかが鍵を握る。自分の頭の中であれ、インターネットであれ、またすでに知っている既知のものであれ、まだ知らない未知のものであれ、それらの知識は無数にある。それら全てを使って考えることは不可能であり、何が必要な知識で、何が必要でない知識かを選別しなければならない。勿論、個々の状況によって必要とされる知識は絶えず変わることになる。つまり、臨機応変に対応することである。逆に言えば、臨機応変に対応するには、大量の知識量が絶えずなければならず、知識量は増えれば増えるほど良いことになる。知識量が少なければ、選択肢も少なくなり、状況判断も限定的になってしまうからである。何を、どれだけ知っているか、どのように考えるかは状況を判断する上で必要になる。つまり、どれだけ知識量があるか、どれだけ思考力があるかが問われる。ところが、いくら知識量が多くても思考力がなければ、状況を把握することはできないが、たとえ知識量が少なくても思考力があれば、状況を把握することができる。思考力が高く、優れていれば、少ない知識量でも状況を把握し、判断することができるからである。それは、思考力の重要性を表す。

人々は絶えず状況判断に迫られている。日常生活における些細なことから、学校、会社などで起きる問題まで、社会情勢、国家情勢、世界情勢まで、絶えず状況判断が求められている。そこで、思考力は重要な役割を果たす。例えば、情報を収集し、その情報を理解し、そのことで何が必要で、何が不必要かを選別し、さらにそのことでどれとつなげ、どれとつなげないかを決め、つなげてどのようにまとめ上げるかを明らかにする。情報の収集以降の情報の理解→情報の選別→情報をつなぐ→情報をまとめ上げるが思考過程になる。ただし、ただ闇雲に情報を収集するのではなく、関連する情報を探し出すことになれば、それも考えることであり、情報の収集も思考過程の1部になる。例えば、インターネットである語を入力して検索すると、その語のついた情報が大量に出てくる。その段階では考えることにはならず、単純に入力して検索するにすぎない。その大量の情報の中から関連ありそうな情報を探し出すことになれば、それは考えることになる。その意味から言えば、情報の収集→情報の理解→情報の選別→情報をつなぐ→情報をまとめ上げ

るが思考過程になる。その思考過程は低度な思考から高度な思考へと段階的に向上していく。情報の収集は最も低い程度の思考であり、情報をまとめ上げるは最も高い程度の思考になる。つまり、情報をまとめ上げていって状況を正確に把握し、判断するには高度な思考力が必要になる。そのこともあり、つまり難しさの為に、多くの場合、思考過程の1部を省略して、例えば、情報の収集からいきなりまとめ上げて状況を判断したり、情報の理解まで行っていきなりまとめ上げて状況を判断したり、情報の選別まで行っていきなりまとめ上げて状況を判断したり、情報をつなぐまで行くが、まとめ上げることはせずにそのまま状況を判断したりする。

思考過程の全てを経るには高度で、複雑な思考力が必要である。一見すると、高度で、複雑な思考力は難しいように思われるであろうが、決してそうではない。低度で、簡単な思考力（例えば、情報収集）よりも難しいと言っているだけで、思考の全過程それ自体はそれほど難しい訳ではない。日常生活の些細なことでもできるからである。例えば、コンビニで昼の弁当を買う時を考えてみよう。偶然見かけたコンビニに入り、たまたま目に入った弁当を買ったり、友人の薦めるコンビニで友人の薦める弁当を買ったり、コンビニで話題になっている（流行っている）弁当を買ったりする場合、情報を収集しなかったり、他からの情報を鵜呑みにしたりするだけで、考えている訳ではない。しかし、何軒かのコンビニを見て回り、どのような弁当が売られているかを見て回って弁当を買う場合、価格、品質、好みなどについて情報を収集し、それらの情報を理解し（具体的な価格、品質、好みなどで、ある店は500円で、別の店は550円という具合に）、それらの情報をつなぎ、まとめ上げて特定の弁当を買うことになる。勿論、それらのことが1度で行われなくても構わない。いつも通っている道にあるコンビニを日々見たり、中に入って弁当を見たりするのも構わない。また、毎日弁当を買っていれば、慣れが生じて瞬時に決めて買うように思われるであろうが、それでも考えて買うと言える。何でもそうであるが、慣れは考えていることを意識させないが、たとえ瞬時に決めて買うにしても、考えていることには変わらない。

そのように考えていけばわかるように、高度で、複雑な思考力が必要になると言っても、日常生活でも日々行っていることであり、それほど難しい訳ではない。勿論、会社で営業不振の問題を解決するには難しさはある。つまり、思考過程は基本的には変わりなく、ただ個々の状況に当てはめると、難しい場合もあれば、難しくない場合もあるにすぎない。むしろ、思考過程の1部を省略したり、変形したりすることで生まれる難しさと混同されることを認識することの方が重要である。考えずに（思考過程の全てを省略する）、十分に考えずに（思考過程の1部を省略する）、間違えて考えたりして（思考過程を変形する）状況を把握し、判断すれば、実際に動いてみると、障害にぶつかり、問題が解決できず、結局言い訳として難しいと言うことがよくあるが、それは思考過程をきちんと経ていないからである。簡単に言えば、考えることの意味を理解していないからである。ただ考えればいいのではなく、どのように考えるかが大事である。その点を忘れてはいけない。

極端な言い方をすれば、基本的な思考過程が分かっているならば、たとえ少ない知識量であっても状況を把握し、判断することはできる。そのことについて少し考えてみよう。例えば、販売不振で商品が売れない問題をどのように解決するか、販売不振の状況をどのように打開するか。販売のベテランのビジネスマンと販売には素人の教員を比べてみよう。ビジネスマンは過去の長い経験から大量の情報量を持っており、さらに個別の販売不振の問題に関しても情報を収集し、それらの情報を理解し、つなげ、まとめ上げて状況を把握し、判断する。それに対して、教員は過去の経験が全くなく、ただ販売不振の問題に関する情報だけを収集し、それだけを理解し、つなげ、まとめ上げて状況を把握し、判断する。情報量の差は歴然としている。そうであるとしても、教

員は基本的な思考過程を理解し、それに従って情報収集から状況判断までをきちんと実行していけば、問題解決へと近づくことができる。ビジネスマンであっても、最終的な問題解決が容易でないことを考えれば、同様であると言えよう。実際問題として、販売不振の問題の最終的な解決はたとえ誰であっても容易ではないことは明らかである。むしろ、素人はベテランが見落としていたことに気づくことがある。素人ならではの気づきであり、ベテランならではの見落としである。話は変わるが、部外者の意見を聞いたり、部外者を参加させたりして調整することがよくある。部内者が見落とし、気づかないことに部外者が気づくことがよくあるからである。それと同様である。結局、基本的な思考過程を理解し、それに従って行えば、後は個別の問題に関して情報収集から状況判断までを行えば、誰でもできるはずである。それなしでは、たとえベテランであっても、過去の経験だけを頼りにして失敗することになる。誰もが経験しているであろうが、考えずにただ過去の経験だけに頼ることの愚かさである。まさに、考えのないこと、考えの足りないことを愚かと呼ぶのである。

状況判断における思考力の果たす役割は理解されたと思う。思考力は自然に湧いてくるものではない。赤ん坊も大人も同一の思考力を持っている。しかし、赤ん坊も大人も教育され、訓練されなければ、思考力は充実しない。その点でも同一である。思考という容器は同一であるが、容器の伸縮性は教育と訓練によって得られるものである。従って、赤ん坊も大人も同一の思考力を持っているとは同一の容器を持っていることを意味し、大人であっても教育と訓練がなければ伸縮性は得られず、赤ん坊であっても教育と訓練があれば伸縮性が得られるのである。幼稚な大人もいれば、利発な子供もいるのはその為である。

では、思考力の教育と訓練はどのように行われるのか。ただ放っておけばできるものではない。成長に任せて知識量が増えていけば、自然に思考力が生まれ、高められるものではない。思考力は誕生の最初から持っているもので、後はいかに高めるかである。それが教育と訓練である。勿論、学校に限定するものではない。学校でも、学校外でも構わない。むしろ、学校外の方がより重要になる。また、他からでも、自分でも構わない。むしろ、自分の方がより重要になる。つまり、思考力の教育と訓練は自分で行う自己教育と自己訓練が重要になる。学校などの他から教育され、訓練されることは重要であるが、それだけでは思考力は高められない。奇妙なたとえばかもしれないが、知識は他の協力で得られるが、思考は孤独なものである。知るとは、勿論自分で知ることであるが、他（他の人々、マスコミなど）を通してなされることが多いのに対して、考えるとは自分で考えるしかないからである。知るとは他に頼る他力本願のようなものであるが、考えるとは自分に頼るしかない自力本願のようなものである。自分の代わりに他の人が考えても、それは考えることにはならない。

知識が他力本願であると捉えれば、知識は他の助けによって得られ、あらゆる場で教育され、訓練される必要が出てくる。その代表例が学校である。自分1人で知ることのできる範囲は非常に限られているからである。それに対して、思考が自力本願であると捉えれば、思考の仕方（それ自体は知識として得ることになる）は教育され、訓練されることがあっても、思考は自分1人でするしかないし、自己教育と自己訓練になる。そうであれば、知識が学校で教育され、訓練されることは重要であり、ただ理解せずに丸暗記するような知識の詰め込み主義に問題があるにすぎない。また、理解するには考える必要があり、その意味では、知識が教育され、訓練されるには思考力が求められることになる。そして、思考力を充実させるには、理解だけで済ますのではなく、情報の収集→情報の理解→情報をつなぐ→情報をまとめ上げるという思考の全過程が教育され、訓練されなければならない、学校でできることはそのような考え方（思考の全過程の

方法)を知識として教えることである。そのような考え方の知識を得、後は自分で考えるしかなく、自分で、自分を教育し、訓練していかなければならない。簡単にまとめれば、学校では知識と思考が教えられなければならないが、知識も思考も知識という形で教えられるしかない。後は児童、生徒、そして学生の主体的な関わりしかない。自分で考えようとしなければ、何も始まらない。数学、論理学などの授業を聞いても、理解せずに丸暗記して知識として得るにすぎないのであれば、思考の為の思考ではなく、思考の為の知識になってしまう。つまり、学校教育について、知識の詰め込み主義は問題であるが、知識を教えることを主目的にすること自体に問題がある訳ではない。思考については、授業で知識として教えるだけでは十分ではなく、自分で考えるような雰囲気づくり、環境づくりに心がけることが必要になってくる。勿論、最終的には自分一人で考えるしかない。ただ、それへの道筋を示すことは必要になってくる。

知ることが重要であるのは確かである。今の人々は知らないことが多すぎると言われるのも確かである。では、どうするか。必要とされる知識を全て学校で教えることはできない。だからと言って、マスコミ、口コミなどに頼り切ることもできない。家庭で教えることも限界がある。折衷的に言えば、あらゆる場で知識を得る。それしかないであろう。そう言っても、インターネットが普及した現在、情報が溢れている。そのような大量の情報が全て知識として自分の頭の中で定着し、蓄積され、記憶されるとは誰も言えないであろう。土台無理な話である。情報過多の中で何も考えられないとか、情報を得るのに時間が取られ、考える時間も余裕もないとか、そのようなことを耳にすることはよくある。情報に振り回され、情報を知るだけで精一杯になっている。そのような状況では考えることすらできなくなってしまふ。そのような状況を打開するのは考えることである。それしかない。物事を知れば、その結果として知識になり、知識を考えれば、その結果も知識になり、思考方法を知っても、考えても、その結果も知識になるという具合に、全ては形のある知識として存在し、それが積み重なって膨大な知識量になっている。歴史について出来事と年代を覚えたり、地理について国の名前と位置を覚えたりするように、理解せずに丸暗記して知識になっても、大量の煉瓦(知識)が散乱しているにすぎない。それらの煉瓦を高く、強固に築き上げるのはセメント(思考)で固めることで可能になる。膨大な知識量は思考力によって高く、強固に築き上げられる知識量である。従って、知ることも重要であるが、それと同等に、それ以上に考えることも重要であるのは確かである。そうであれば、学校での知識の詰め込み主義は頭の中で大量の煉瓦が散乱している状態を意味し、精神錯乱のようなものであると言うことができよう。それに対しては、学校では煉瓦だけでなく、セメントで固めることも教えていると反論する人もいるかもしれない。そうであるとしても、煉瓦を2、3個セメントで固めるぐらいであるし、百歩譲って全体を築き上げるとしても、それは学校が決めたルールに従って押しつけるものである。それでは、受験に成功しても、人生に成功することはない。自分で考え、自分で煉瓦をセメントで固めて築き上げるしかないのである。学校で思考を教えることが不可能であると言いたい訳ではなく、知識として教えるという限界があることを認識し、その上で自分で考えるような雰囲気、環境をつくっていくしかないし、後は児童、生徒、そして学生の主体的な関わりで自分から考えていくようにするしかないということである。

最後に：

頭の良さは何で決めるか。その返答は知識量ではなく、思考力である。ところが、一般的には知識量によって決められてしまう。極論すれば、記憶力である。どれだけ多くの知識量が頭の中にあり、記憶されているかである。知るか、知らないかの差は、知らなければ知ればいいことで

あり、容易に埋めることができる。だから、若い時にできる限り多く知ることが必要であると主張することができる。また、だから、いつでも知りたければ知ることができる」と主張することもできる。学校にいる時に知らなくても、学校を出た後でもいつでも知ることができる。それに対して、思考力はいつでも高められるものではない。若い時にできる限り多く知って、大人になってから考えればいいというようなものではない。赤ん坊も大人も思考力は同一で、思考という容器は同一であるが、容器の伸縮性は若い時の方が得やすいからである。別に、若い時の方が体も頭も柔軟であるとか、若い時の方が学校に通っているだけで時間が十分あるとか、そのようなことを言っている訳ではない。勿論、それらもある。むしろ、大人になると知識量が大きく増え、考えることを邪魔することになる。つまり、知識量の多さが思考力を妨げるのである。大人と比べれば、知識量がまだ少ない若い時の方が考える余裕がある。例えば、情報が多すぎると考えることすらできず、情報に振り回され、結局何も考えられずに終わってしまうことを経験した人々は多くいるはずである。赤ん坊から大人になるまでの間は、知識量が徐々に増えていく段階である。少ない知識を使って考える時なのである。知識を理解し、つなげ、まとめ上げる思考過程に十分時間をかける時なのである。だから、逆に、若い時にできる限り多く考え、大人になってから知ればいいことであると言えよう。

赤ん坊から大人になるまでの間に得なければならない知識は当然ある。ただし、知識量の増加だけに専念するのではなく、知識を使って思考する方が重視されるべきである。知識は時と共に変わり、学校で習ったことが卒業後10年も経てば古くて使えなくなることがあるが、思考は時が経っても変わらない。つまり、知識量は時と共に増え続けるが、その中にあって絶えず新しい知識が入り込み、必要とされる知識が絶えず変わるが、思考力は時と共に絶えず変わるようなものではない。簡単に言えば、基本的な考え方を得ておけば、知識が変わってもいつでも対応することができる。だから、思考力が重視されるべきなのである。

情報過少の昔であれば、知ることの果たす役割は大きかった。しかし、情報過多の現在、考えることはなくてはならない力になっている。思考はまさに力である。今を生きる人々に求められている力である。知ことは大事であるが、それにも増して考えることが大事である。考えずに済みますのではなく、考えて済ますことを心がけなければならない時代である。氾濫している情報に流されることなく、自分であり続けるには思考力は貴重な武器になる。